

手銭家所蔵連句資料一覽（上）

佐々木 杏 里
（公益財団法人手銭記念館学芸員）

摘 要

手銭家に残る文書の中から連句資料をリスト化した。手銭家に残る連句資料は、宝暦から天保までにわたっており、それぞれの時代に杵築文学に関わった人物、他所との人的交流、時代の変遷などを類推・特定するために大変貴重な資料である。

キーワード・連句、季硯、百蘿、大社、手銭記念館

はじめに

手銭家初代・長光は、貞享三年（一六八六）出雲市白枝町から大社へ移り住んで穀物商を始め、後には酒造業を営んだ。江戸時代を通じて酒造業を中心に、木綿、木材、藩の御用など広く商売を手がけた手銭家は、大年寄といった町役や御用宿を勤める一方、千家家近習格となるなど出雲大社とも深い関わりを持ってきた。

このような手銭家には、書画・工芸品等の美術資料ならびに文書資料が数多く伝来しており、主な美術資料は公益財団法人手銭記念館に寄贈され、展示公開されている。

文書は、「御用留」、歴代当主による「萬日記」をはじめ、政治・経

済・文化に関する様々な分野の資料が、江戸時代中期から近代までの約二〇〇年にわたって残っている。

このうち、江戸期の書籍約六百五十点並びに短冊や一枚摺、詠草などの文芸関係資料計千六百点余りについては、平成十七年度から山陰研究プロジェクトの調査対象として継続して調査が行われている。

この調査の過程で、杵築（現・大社町）という地域で江戸時代を通じて豊かな文芸活動が継続して行われてきたこと、手銭家各代の当主や家族がそれらの活動に積極的に関わっていたことが次第に分かってきた。

一 手銭家の文芸資料

文芸関係資料には、短冊、詠草、巻紙、冊子、一枚摺、刊本、写本がある。三代・季硯から八代・安秀まで各代の当主らが俳諧、和歌、連句、漢詩などを残しているほか、折々に贈られたと思われる短冊・一枚摺・刊写本等があり、各代が熱心に文芸活動に励んだことが窺われる。

各代が残した文芸資料は大まかに以下のように分類できる。

- 三代・季硯―発句、連句、和歌、漢詩、句文
- 四代・敬慶―和歌
- 五代・有秀（白澤）―発句、連句、和歌、句文
- 六代・有芳（野塘）―発句、連句、漢詩、和歌
- 七代・有頼―和歌、発句
- 七代妻・さの子―和歌、発句、連句
- 八代・安秀―和歌、発句

このようにどの代にも作品が残るが、殊に、三代・季硯（一七一―九二）、五代・有秀（白澤）（二七七―一八二〇）、六代・有芳（野塘）（一七八九―一八四三）、七代有頼の妻・さの子（一八一三―六二）による資料が多い。彼らは皆、連句を残しているという点でも共通している。

連句は、「俳諧之連歌」とも呼ばれ、連歌から発生し俳諧の母体となった「座の文芸」である。複数の人物が集まり句を連ねる連句は、江戸期を通じて盛んに行われた。

二 季硯時代（宝暦〜寛政）

三代・季硯による資料では、広瀬百羅・冠李らとの連句の他、遠方から訪れた俳諧を嗜む人々と連句を楽しんだものも多く、一部には「季硯冠李両子」などと二人の名が併記されていた。

冠李についてはこれまで特定できなかったが、最近になって季硯の弟（兵吉郎長康）だったことが明らかになり、季硯・冠李の二人が揃って俳諧の世界でそれなりに評価されていたらしいこと、杵築の人々と外部との俳諧による交流が頻繁に行われていたことなど、今まで知られなかった事実が現れてきた。

また、資料によって「俳諧」と「俳諧」という二種類の「はいかい」表記がある。

手銭家所蔵の俳論書によると、「俳諧」は支考を祖とする美濃派の用字であって、百羅を中心としていたと思われる杵築俳壇の人々は「俳諧」が正当な表記だと考えていたようである（伊藤善隆氏のご指摘による）。

このことは、杵築俳壇の特徴とも関わることであり、今後、より詳しく検討する必要があると考える。

三 有秀・有芳時代（文化文政〜天保）

五代・有秀、六代・有芳時代になると、百羅の息子である日々庵浦安（一七六五〜一八四六）の名前が多く見られ、一部資料では「宗匠」となっていることから、浦安が座の中心となり指導的役割を果たしていたことがわかる。

この時代には、月に一、二回の割合で会が続く一連の資料や、一回

手銭家所蔵連句資料一覽

◎季硯(二七一―一七九六)時代

花の前塵と見る日や冬牡丹
垣のやつれにさゆる桂男
季硯
富英

1 独吟十二句(季硯) / 『松葉日記』

長谷氏の何がしやめる事ありけるをはやくも快復あらん事を
祈るにはいかい首尾の吟を綴り其鬱情をいさむる連句の中鶴
亀松竹を以て祝言をうたふ誠に笑談の拙章見る人笑らふへ
し／＼

5 二吟二句(季硯・富英) / 『葡萄棚卷之二』

会釈

余所に聞鹿の咄しや小六月
下戸の出合に叶ふ茶の花
富英
季硯

竹子や喰残されて今とし竹

6 三吟三十六句(富英・季硯・南綏) / 『葡萄棚卷之二』

歌仙行

鶉のくゝる瀬や小春の花の波
杭て存しも力もつくれ
富英
季硯

こゝろよいもの夏の朝起
飼鶴もすり餌の音に目覚して

2 二吟二句(季硯・茁天) / 『葡萄棚卷之二』

春笑法師の尋に預る日

鶴遊ふ一日は芦も花むしろ

7 二吟二句(冠柳・硯(季硯)) / 『葡萄棚卷之二』

豊前の冠柳坊此五月七日尋ねらる

さひ付し庵の巖や苔のはな
暮ぬ内より建る蚊はしら
豊前
冠柳

3 三吟十八句(茁天・冠李・季硯) / 『葡萄棚卷之二』

即興

花を待こゝろもさへし冬隣

8 二吟二句(全(季硯)・冠柳) / 『葡萄棚卷之二』

会釈

笠かけよ藜は杖にならすとも
香を汲添て花のひあふき
全
柳

火に寄やすき月の行里
網代場ハ秋の末より懸置て

4 二吟二句(季硯・富英) / 『葡萄棚卷之二』

富英子にまねかれて

9 二吟二句(虚舟・季硯) / 『葡萄棚卷之二』

端書略

月も花もこゝろまかせの茂り哉 虚舟

闇の紛れをとほすⅡ【虫偏に干】火 硯

10 二吟二句（季硯・龜茗）／『葡萄棚卷之二』

会釈

人目にはむすふとなしに清水哉 硯

舟とも呼ハす渡る涼風 茗

11 二吟二句（、（龜茗）・季硯）／『葡萄棚卷之二』

会釈

夏雨やぬれても道の涼しさに、

着なり寐なりに帷子の肌 硯

12 宝曆四年六月

二吟二句（硯（季硯）・龜文）／『葡萄棚卷之二』

宝曆四のとし六月廿一日難波干霜庵龜文子来てあるし季硯在

宿哉と問ふ季硯ミつから立出て季硯は他出也と言ふ遠きにあ

りや近くにありいさ先笠をかけ給へと言ふに随ひとりあへぬ

調度も漸時過るころ季硯対顔するに龜子季硯なる事をしらす

して季硯子はいまたかへらさるやと問ふに季硯と尋ねらるゝ

事の恥しさに暫時其名を隠して

□□て蚊帳を此夜の隠し衰 硯

我花をたて廻す葛の葉 龜文

13 二吟二句（、（龜文）・硯（季硯））／『葡萄棚卷之二』

季硯子の雅名遠くは綈に響き近くは耳に轟きて

湖も何□起る蓮の花、

月の旅寐や夕かほの窓 硯

14 二吟二句（、（季硯）・文（龜文））／『葡萄棚卷之二』

龜文子に対して

柳にも糸はあれともさくら麻、

瓜に向ふてうにならぬ花 文

15 二吟二句（文（龜文）・硯（季硯））／『葡萄棚卷之二』

風流をもて雅名を隠し給へはかくされて遊ぶも有□ならんか

羽た、きも風より涼し鸛の侍 文

□干の唯咲て居る 硯

16 二吟二句（文（龜文）・硯（季硯））／『葡萄棚卷之二』

対季硯子

一句を出せは一句を吐く同し八雲の道なから子は芭蕉の流を

汲ミ予は才麻呂の末を慕ふ其かわらぬも風雅の情にして替る

も又風雅の花也天いつれをか捨ん地いつれを愛せん

皆土の備る味そ蓼生姜 文

笠着て来てはけふとまり鶉 硯

17 二吟二句（龜文・季硯）／懷紙一枚

贈 季硯子

一句を出せは一句を吐く同し八雲の道なから子は芭蕉の流れ
を汲み予は才磨の末を慕ふ其言かハラぬ風雅の情にしてかハ
るもまた風流の花なるへし天いつれを捨ん地ハいつれを□と
せん

皆土の備へる味そ蓼生姜

亀文

笠すて来てはけふとまり鶴

季硯

18 二吟二句(季硯・麻□) / 『葡萄棚卷之二』

松江にて麻□法師を尋て

夏の夜にいさつき□ん笠のひも

季硯

夏の夜をいさ蚊をわすれ艸

麻□

19 二吟二句(麻□・硯(季硯)) / 『葡萄棚卷之二』

返し

木の下の闇をぬけたりく、つたり

、

月の落着かたへほたる火

硯

20 二吟二句(臥猪・季硯) / 『葡萄棚卷之二』

いつまでも振向花の峠かな

臥猪

□□に暮て丁と宵月□

季硯

21 二吟二句(芦月・硯(季硯)) / 『葡萄棚卷之二』

高さほとひくきも撫る柳かな

芦月

蛙に知恵のはやひ鶯

硯

22 二吟三十六句(季硯・亀文) / 『葡萄棚卷之二』

大坂亀文字附合句前にもらせしゆへ爰に出ス也

あら海や□の背より雲の峯

亀文

風物くさき垣に昼かほ

季硯

汁の実にこまらぬ程の畑持て

文

23 二吟二句(雲吐・季硯) / 『葡萄棚卷之二』

冠冠子は於杵築吟し今朝季硯を慕ひて松江にいたる

湖を中にはさむや雲のみね

雲吐

はや松茸の笠に薫ノ

季硯

24 二吟二句(季硯・雲吐) / 『葡萄棚卷之二』

栗津なる雲吐法師に□□会す

早乙女のうたの〓【□偏に化】を□せん 季硯

君か杖にはならず若竹

雲吐

25 七吟十八句(雲吐・重枝・季硯・臥猪・有梅・梅人・梧鳳) / 『葡
萄棚卷之二』

玉産の諸賢へ宿して

裏表なき交りや辻か花

雲吐

笠かけてより明安き月

重枝

迎へ駕寐驚なからに□寄て

季硯

26 三吟十四句(芙川・季硯・梅人) / 『葡萄棚卷之二』

短歌行

短歌行

吹けるに風もみのるや渡鳥
□にすれば月もよい程
掛水の来る筋はかり秋更て
季硯
美人

27 三吟三句 (季硯・嵐白・冠李) / 『葡萄棚卷之二』

感瑞夢を得奉りて其祝意を□たふ

見て置ん嫁取よしを初曆
季硯

注連も縁を洗ふ門松
嵐白

鶴に又蝶の折かた春めきて
冠李

28 二吟二句 (魯川・季硯) / 『葡萄棚卷之二』

会釈端略

物々し住居や花のあるし達
魯川

むしろの数に小豆若艸
季硯

29 二吟二句 (笑道・季硯) / 『葡萄棚卷之二』

会釈

月の夜は見つゝ隠れつ虫哉
笑道

葵の花の段々に咲
季硯

30 独吟二十四句 (不明) / 懐紙一帖

短哥行

伏勢のなき代や鴈の渡りやう

山の錦につつむ弓張

面白い所へつふした窓明て

31 三吟二十四句 (芙川・季硯・冠李) / 懐紙一帖

此野にも月の入たる薄哉

鴟より早い旅の朝立

雇人來れハ新酒の嗅かして

※当該資料は記名がないが33により作者が判明する為三吟とする

32 二十四句 (不明) / 懐紙一帖

夜風のちきれ／＼やきり／＼す

留守かと覗くやうな月影

隙にした旅さへ秋ハいそかれし

※当該資料に記名がなく独吟か連吟か不明

33 「宝曆九年卯仲種於葡萄林興行之」

三吟二十四句 (芙川・季硯・冠李) / 懐紙一帖

誹諧之連歌

此野にも月の入たるすゝき哉

百舌よりはやひ旅の朝起

雇人か來れは新酒の嗅かして

34 宝曆十年長月廿九日

三吟三十六句 (季硯・百羅・冠李) / 懐紙一帖

誹諧之連譚

小鳥皆渡ししまふて渡鶴

鶴も一夜をこの松の月

くつろひてかたれは古酒の今酔て

冠李

35 三吟三十六句(百蘿・季硯・冠李) / 版本(題箋剥離のため書名不明)

不明)

百蘿坊下向の折に

小鳥皆渡し仕舞てわたり鶴

鶴も一夜を此松の月

くつろひてかたれは古酒の今酔て

※当該資料は記名がないが34より作者が判明する為三吟とする

36 四吟十二句(蕉水・季硯・寸虎・蟻弥) / 仮綴じ一帖「見聞集」

季硯風流の旅亭にまかりて

添竹のふしの一夜を百夜草

列明て待小田に厂かね

盃の影きふ／＼と窓に来て

蕉水

季硯

寸虎

37 三吟三句(季硯・季風・如累?) / 仮綴じ一帖「見聞集」

志願の事ありて東に赴首出の日津満亭に富士の絵をかけられ

たり 自然の喜瑞を思ひ合せて

富士の夢合せ鏡や月の秋

門田に居る御代の初鶴

落栗の頃とて朝を早起て

季硯

季風

如累?

38 二吟二句(一步園艸・季硯) / 仮綴じ一帖「見聞集」

渭樹江雲の情を拝んと此秋ハ季硯子を誘ふて

一葉つ、拾ひ合せん袖たもと

一步園艸

振茶をむしにたのむもてなし

季硯

39 二吟二句(季硯・芙川) / 仮綴じ一帖「見聞集」

此秋一步園のあるしに訪れて正風の談を得たり

其上の馴染こ、ろや藍の花

わたり鳥とて招かねとて

季硯

芙川

40 二吟二句(季硯・瓢十) / 仮綴じ一帖「見聞集」

石の瓢十子に訪れて東海道之物かたりを聞に甚羨に堪たり

能因のあと誰／＼そ天津厂

其錦からとて草枕

季硯

瓢十

41 二吟二句(柿子・季硯) / 仮綴じ一帖「見聞集」

去年は月に風窓をならひ□今としは花に吟を祝ふ此亭のある

しは我ための雅伯にして 彼の六親の其ひとりなるあしたに

は 鳥をあはれみ夕辺には花を愛す 其心の清涼なる其容の

安楽なる 誰か此老をうらやまさらん されは□□三月に及

へとも いまた主人に一句をも贈らす なくて過なんも本ゑ

なけれハとふかくもむれは おのれか闇に迷ひ浅く尋れは

浮華にして信すくなし

春秋や乙鳥間来る花の宿

さくらよも雲袖の墨染

柿子

硯

42 三吟三十六句(季硯・柿子・右硯) / 仮綴じ一帖「見聞集」

此日雨風子に訪れける折から雨のありければ
春雨や客ふたり得て猶閑

蝶も桜の花の縁さき

季硯

あたゝかさ幕から酒の匂ひ来て

右硯

43 三吟三十六句（季硯・柿子・右硯）／仮綴じ一帖「見聞集」

月や花に並へて見たりまめな貌

季硯

命があれば鷹も燕も

柿子

此風はあの山はなを吹て来て

右硯

44 三吟三十六句（右硯・季硯・柿子）／仮綴じ一帖「見聞集」

いさゝらは我も眠らん春の雨

右硯

月のさくらを浦のもてなし

季硯

兀た山兀ぬ山から咲かれけし

柿子

45 二吟二句（為暁・季硯）／仮綴じ一帖「見聞集」

季硯雅伯の貴館をはしめて訪ひ侍りて

葉桜や百里聞てふ風のおと 筑前

為暁

裕もかろし此身此まま

季硯

46 三十六句（不明）／仮綴じ一帖「見聞集」

歌仙行

新茶かと問は古茶にも裕かな

春すたれから風の折／＼

打枝や真帆も片帆も目の下に

※当該資料に記名がなく独吟か連吟か不明

47 十九句（不明）／仮綴じ一帖「見聞集」

歌仙

ほととぎすこちらの岑や雲ちきれ

青葉にわかる枚の一村

囉はれて今日菴の茶も酒も

※当該資料に記名がなく独吟か連吟か不明

48 二吟二句（為暁・季硯）／仮綴じ一帖「見聞集」

季硯雅伯の風館にはしめて訪ひ侍りて

葉桜や百里聞てふ風の音 筑前

為暁

裕もかろし此身此まま

季硯

49 二吟二句（全（季硯）・為暁）／仮綴じ一帖「見聞集」

筑紫なる為暁雅伯に訪れて

河百里海百里山ほととぎす

全

貌み分け入る卯の花のかき

為暁

50 二吟二句（茂竹・季硯）／仮綴じ一帖「見聞集」

再白澤の風窓を叩て

河骨や鳩の浮巢のなかれつき

茂竹

苦屋の窓に月の梅雨晴

季硯

51 二吟二句（硯交・季硯）／仮綴じ一帖「見聞集」

白澤主人の風窓を尋けるに打水のさすて五尺のあやめ艸と有
吟を給りければ

あやめにも届ひて見はや真こも艸

硯交

去年の竹もおなじ若竹

季硯

52 二吟二句(季硯・硯交)／仮綴じ一帖「見聞集」

浮雲流水の風騒茂竹主人に対す

萍の花や根とてはおろさねと

季硯

此泉水を濁す五月雨

硯交

53 三吟四句(硯・季硯)・茂竹・冠李)／仮綴じ一帖「見聞集」

会題

打水も届け五尺のあやめ艸

硯

山の如なる石にさゝ蟹

茂竹

百里来ても都の風を言ぬかな

冠李

54 二吟二句(竹(茂竹)・李(冠李))／仮綴じ一帖「見聞集」

涼しさや線に見すかす蔦の数

竹

汗の此身を恥る縁ささ

李

55 三十六句(不明)／一帖「俳諧季よ勢哥仙」

春かせん

かさりけり秋の木の実も今朝の春

また淡雪の峰にうくひす

下萌にいつ□の芦の角現て

※当該資料に記名がなく独吟か連吟か不明だが書体等から季硯が記したものと考える。

56 四十四句(不明)／一帖「俳諧季よ勢哥仙」

夏四十四

若竹のやふに尊し桐の花

鷹毛を替て鳥屋に入友

煮さけにて木の下闇を茂聲ん

※当該資料に記名がなく独吟か連吟か不明だが書体等から季硯が記したものと考える。

57 三十六句(不明)／一帖「俳諧季よ勢哥仙」

種歌仙

秋たつや桐も一葉の藪に落

山をわかれて時を出る鷹

朝貌は身に入む月のつと入て

※当該資料に記名がなく独吟か連吟か不明だが書体等から季硯が記したものと考える。

58 二十四句(不明)／一帖「俳諧季よ勢哥仙」

冬短哥行

木からしや時雨を拝む神送り

茶の口きれは片鶉なく

月寒し八手の花と枇杷咲て

※当該資料に記名がなく独吟か連吟か不明だが書体等から季硯が記し

たものと考える。

59 天明七未十一月十二日会

七吟三十六句（忍更・蕉雨・釣水・壽山・泉里・柳雨・硯李・執筆）／
仮綴じ一帖「蕉翁忌日之会」

歌仙

うくひすも知らは問ひ来ん冬至梅

忍更

雪をこほして起直る竹

蕉雨

隣からとなりへ裏の道つけて

釣水

60 三十六句（不明）／懐紙一帖「点合歌仙行」

□□枯て狐の覗く庵哉

冬の日脚の恣にかたふく

竹□入か帰重は少し腹へりて

※当該資料に記名がなく独吟か連吟か不明だが書体等から季硯が記したものと考える。

◎有秀（白澤）（一七七一〜一八二〇）時代

61 九吟十八句（百蘿・巴龍・冠李・菅李・菅川・仙菊・一毛・有秀・箕山・
波光）／一枚摺一枚

老の身八門を見んとある人のいへるをもこよひの清光に物忘
れして徳園の翁とともに爰の海へたに吟行す

須磨はいさいさゝの濱のけふの月

百蘿

鴈か唐槽か沖にすむ聲

巴龍

手銭家所蔵連句資料一覽（上）（佐々木杏里）

かさねたる袷に裾のおもたく

冠李

62 寛政九年 去十二日月次会 仙菊亭 うら安集書

五吟十二句（阿り秀・うら安・百蘿・一毛・ゆき丸）／仮綴じ一帖「良
夜吟」

蓮の実の飛もなつかし冬の音

阿り秀

袖にしくる、竹のしら露

うら安

よイ八月昼は源氏に秋ふけて

百蘿

63 七吟八句（満弓・百蘿・有秀・一毛・浦安・巴石・巴弓）／仮綴
じ一帖「きさらき日記」

羽やすめにたのむかけあり飛ひつはめ

満弓

言葉の花にかほる北窓

百蘿

長き日もあかぬ遊ひに暮過て

有秀

付記

資料翻刻ならびにリスト作成にあたっては、湘北短期大学の伊藤善隆氏、鳥根県立出雲歴史博物館の岡宏三氏に多大なご助力、ご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の公開に関するプロジェクト」(二〇一三〜二〇一五年度、代表・野本瑠美)、国文学研究資料館基幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」(代表・大高洋司)の研究成果の一部である。

List of Renku collection in Tezen Family Archives

SASAKI Anri
(Tezen Museum curator)

[Abstract]

This report is the list of Renku from the document that remains in Tezen Family. Renku in Tezen Family was made from Horeki to Tempoh period. Renku archives of Tezen Family is very valuable in order to find the person involved in Kizuki literature of each times and to study the exchanges with other regions people, changing of times.

Keywords : Renku Kiken, Byakura, Taisha, Tezen Museum